

平泉世界遺産ガイダンスセンター 開館記念企画展の研修視察を中止

岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンターが昨年11月20日に開館し、その記念企画展が開館当日から本年2月13日まで開催された。

平泉世界遺産ガイダンスセンター開館記念企画展は、特に紫波町にある薬師堂安置の七仏薬師如来立像を中心とした展示であり、奥州藤原氏が構想した仏国土の一端を紹介し、平泉文化を広く理解されることを目的としている。

この企画展への研修視察を本会等が合同で2月11日に実施することとし、参加者が25名程になったが、新型コロナウイルス感染防止を踏まえ3日前に中止とした。

なお、下の文章や図は、平泉世界遺産ガイダンスセンターが開館記念企画展用として、発行されたガイドブックから「比爪館」に関わる部分を抜粋して掲載した。

比爪館の発掘調査では、仏堂を荘厳する[幡]の金具、蓮華形の馨、密教法具の五鈷杵が出土しており、大荘厳寺に関わる可能性が高い遺物です。



吊金具 比爪館跡出土 紫波町教育委員会蔵



幡模式図



蓮華形馨 比爪館跡出土 紫波町教育委員会蔵



五鈷杵 比爪館跡出土 紫波町教育委員会蔵

比爪の中核である比爪館とその周辺では、平泉と共通する質、量の国産陶器や中国陶磁器が出土し、儀礼的にかわらけも同様多量出土します。まさに比爪は、第二の平泉といえる。

《《令和4年3月～4月行事予定のお知らせ》》

3月16日 (水曜日)	第128回 月例発表会	午後7時から午後9時 会場 赤石公民館 講義室 発表者：宇部真澄 テーマ「ある南部杜氏の回想記3」 発表者：金濱興一 テーマ「志和城の外郭」
4月17日 (日曜日)	令和4年度 定期総会	午後1時30分から午後2時15分 会場 赤石公民館 ホール
	第129回 月例発表会	午後2時30分から午後4時30分 会場 赤石公民館 ホール 発表者：平井和夫 テーマ「吾妻鏡で見る北条義時」

2月16日に開催した第127回月例発表会において、二人の発表者が用いました資料からほんの一部文面を、ところどころ抜粋して掲載しますので承願います。

宇部真澄氏の発表資料「ある南部杜氏の回想記2」から

1. 翌年再び酒蔵へ

二年目もその蔵に行くことになりました。この年から蔵人となり、麴助手をさせられ、ようやく酒屋働きになった気持ちでした。

毎日の仕事の工程は同じですが、覚えるにはそれぞれの仕事場について行って見なければ分かりません。この年から分析も習って、分析も私の仕事になりました。

2. 尺貫法からメートル法へ

酒屋働きする中で一番悩んだのは、尺貫法からメートル法に変わった昭和四十一年でした。尺貫法に慣れたベテランであればあるほど抵抗を感じたと思います。

当時は誰でも、一貫目はあるいは一升ほどの程度の重さか、量かは分かっていますが、一キログラムあるいは一リットルはどれほどの重さか、量かピンときません。それでキログラムまたはリットルを貫や升に換算して見なければ安心できませんでした。

3. 杜氏になって

秋の気配が漂って来る八月下旬から九月上旬に、志和の杜氏たちは緊張した面持ちでそれぞれの蔵に行かれたことと思います。私も蔵人から杜氏になってからはそうでした。

前回造って貯蔵してある酒が良しか悪しか、どのように変わっているかを、確かめる「呑み切り」という仕事があるからです。初呑み切りは、蔵人が一生懸命手塩にかけて育て上げた酒を国税局の鑑定官に、今年もしっかり味のある酒が仕上がっていますねと言われると、杜氏としても本当に気が楽になり一安心するのです。これが終わると、一旦、家に帰り、十一月の初めころに若い人たちに連絡し、皆一緒に蔵入りします。

平井和夫氏の発表資料「三陸沿岸の遺跡と製鉄2」から

『いわて民衆史発掘』八木光則:著 東洋書院 第五章 北の鉄文化を歩く P92

砂鉄にめぐまれた三陸

東日本大震災の後、三陸での遺跡の発掘調査が急ピッチで進められた。その結果、縄文時代や古代の集落遺跡などとともに多くの古代～中世の製鉄遺跡が確認され、製鉄の様子が明らかになってきた。

浜砂鉄 三陸沿岸に古代～中世の製鉄遺跡が多いのは、原料の浜砂鉄にめぐまれていた。北上高地の花崗岩帯に含まれる砂鉄が川から海に流れ、浜に打ち寄せられて浜砂鉄となる。三陸の砂鉄は、東北地方の砂鉄の中で最も不純物が少なく、排出されるスラグ(鉄滓・てっさい)の割合も少ない良質なものだ。

川砂鉄 内陸部では、北上高地から流れる砂鉄川など、川底に堆積した川砂鉄が原料として考えられるが、内陸部における古代～中世の製鉄遺跡は確認されていない。

古代～中世の製鉄集団

三陸の山田湾を見下ろす山田町房の沢古墳群からは、多くの刀や轡(くつわ)などの馬具などの製鉄品が出土した。馬具など蝦夷自らが作った可能性も指摘されている。

奈良時代の前半は、多賀城が築かれた頃で、多賀城の建設を支える製鉄炉が海沿いに設けられている。この時期の遺構は、三陸ではまだ確認されていないが、鍛冶炉の初源がもう少しさかのぼると、房の沢の馬具が地元産であると裏付けられそうだ。

平安時代には、三陸でも砂鉄を原料とする製鉄が始まる。最初は家内工業な小規模な製鉄であったが、次第に大規模な鉄づくり集団が現れるようになる。宮古市島田Ⅱ遺跡は、宮古短期大学の構内にあり、鉄づくり集団の様子がよくわかる遺跡だ。